

10～11月の茶園管理について

秋整枝の注意点

- 1 秋整枝は、来年の一番茶を左右する重要な作業
(1) 秋冬番茶製造に合わせて、時期、整枝の深さを変えない。
(2) 生育状態に応じた整枝位置の調節で芽数・芽重を調節する。

2 秋整枝の時期

(1) 地域別

平年において秋期に旬の平均気温が恒常的に **20℃** を下回り、秋芽の生育が止まって硬化し、整枝後も再萌芽しなくなる時期を目安とする (平年値)。

<秋整枝時期の目安>

		晩生・中生種	早生種
	北部	10月13日～	18日～
南薩	中部	15日～	20日～
	南部	18日～	23日～

- ◎近年、秋整枝後の気温が高く整枝時期を遅らせようとの動きがみられるが、秋整枝が遅れると、翌年の一番茶の収量、品質に悪影響があるので遅らせないように注意。
◎秋整枝時期が早すぎると遅れ芽が多く、再萌芽する場合もある。

(2) 品種別

ア 晩生品種、中生品種、早生品種の順に実施する。

◎ゆたかみどり・あさつゆ等早生品種は、再萌芽をさけるため、最後に実施する。
「おくみどり」は晩生種であるが秋芽が止まりにくい品種であるため、「ゆたかみどり」の直前に行うと良い。

秋芽が遅くまで生育するのは、

「あさつゆ」>「ゆたかみどり」>「おくみどり」>「やぶきた」の順。

秋整枝は

「やぶきた」→「おくみどり」→「ゆたかみどり」→「あさつゆ」の順に実施。

イ 更新園（中切り園，深刈り園）は、やや遅めに実施。

2 秋整枝の方法

(1) 秋整枝位置

判断要素 秋芽生育の良否が樹勢を判断する要素になる。
葉の色，大きさ，葉層，芽数型か芽重型か，品種等を考慮する。
整枝位置 秋整枝は信号機 **青（緑）：良好，黄：注意，赤：深すぎる**
葉層を **最低8cm（タバコ1本分くらい）** は確保する。

ア 三番茶まで摘採した茶園

最終摘採面より5cm程度（2節残す程度）上げた位置で整枝する。

イ 四番茶まで摘採した茶園，秋芽が伸びなかった園（葉層が薄い園）

芽伸びが悪い所は深くならないように頂芽の葉先を軽く切り落とす程度とする。

ウ 更新茶園（中切り，深刈り）

前回整枝位置より5～7cm程度上げた位置（1～2節程度上げた位置）で整枝。

一番茶の芽数を考えて整枝する。

エ 生育不良茶園（中切り更新前の茶園等）

深く整枝すると一番茶の出開きが早くなり，収量・品質等悪くなるので浅めに整枝する。

- ◎中刈り園等秋芽の生育が良い園は葉焼けをおこしやすいため，2回整枝を実施。
（5～7日前に上部を軽く切る）

(2) 秋整枝後、再萌芽した場合

ア 再整枝の目安

- ・再萌芽数が多少あっても翌年の収量・品質にはほとんど影響はない。
→放任し、翌春化粧ならしで除去する。
- ・**30cm×30cm枠内で50本以上**では、放任すると収量・品質が劣る。
→再整枝

イ 再整枝の時期と方法

- ・**11月上旬まで**に実施できる場合：秋整枝面から0.5cm～1cm上げた位置で再整枝
- ・**11月中旬以降**の実施となる場合：翌年の春整枝時期に秋整枝位置から0.5cm～1cm上げて整枝
(一番茶はやや遅れるが品質低下はない)

(3) その他

摘採機の刃を十分研いでおくこと（赤焼病発生の原因になる）。

秋整枝後の防除

秋整枝後はカンザワハダニ、赤焼病の防除時期です。
地域の管理暦に従って、適期防除を行ってください。

<カンザワハダニ>

1 秋整枝後の発生生態

越冬ダニの発生量が翌年の発生量を左右するので、秋整枝後の防除は重要です。
南薩地域では、休眠が浅く冬期に増殖を続けている場合が多いので注意が必要です。

<赤焼病>

1 赤焼病の発生しやすい条件

(1) 寒さ

赤焼病の発病適温は、気温 15℃以下の低温期（11月～4月）で、寒さが厳しいほ場や寒い年は要注意です。初霜の降りる、11月は赤焼病の発生が懸念されるので十分注意しましょう。

(2) 多肥栽培と秋肥の遅れ

年間施肥窒素量 80kg/10a 以上の多肥栽培下では発生しやすい。
また、11月以降に施肥はもちろん堆肥・油粕等の窒素成分を投入することで、発生しやすい。

(3) マシン油の冬期散布

マシン油を11月～12月上旬に散布すると茶の耐凍性獲得が遅れ、発生を助長する恐れがあります。

2 赤焼病の早期発見と早期防除

赤焼病は葉の傷口から感染するので、畑で最初に出る場合には、つぼ状に固まって発生し始めることが多いので、よく観察し早期防除に努めましょう。